新見公立短期大学紀要　第20巻
pp.　117－124,　1999

研究ノート

援助技術論演習ワークブックの活用度と教育上の課題
－ 演習後にアンケート調査を実施して －

杉本幸枝　　土井英子　　石本傳江

看護教育

Practical Use of the Workbook in Basic Nursing Arts and a Problem on Education
— A Questionnaire Survey after Classroom Practice —

Yukie SUGIMOTO　Hideko DOI　Tsutae ISHIMOTO

（1999年11月10日受理）

「リネン交換」「移送の援助」の２項目について、学生のワークブックの活用を通して主体的な取り組みの程度、項目の留意点の認識を明らかにし、今後の教育上の課題を検討するためにアンケート調査を行った。

1．演習の目的・目標などを読んで演習に臨んだ学生は６割以上おり、ワークブックは活用されている。ワークブックを使って事前学習をすることで動機づけになっている。主体的な学習姿勢は育成されつつあるが、より深く追求する姿勢までには至っていないといえる。学生がグループワークや意見交換を行うことで、主体的な取り組みが可能となり、学習効果が高まると考える。

2．留意点からみた教育上の課題は、「リネン交換」ではテクニックに意識が向いており、学生は対象への声かけが欠けている傾向にある。‘もの’ではなく、‘人’としての対象への援助として、声かけが重要であることを指導していく必要がある。また、学生は両項目とも安全・安楽に対する認識を持っているので、認識のレベルから援助を実践できるレベルに高めるような指導が大切である。

はじめに

援助技術論演習は、看護の対象の日常生活上の健康問題、及び治療上における看護問題を理解し、援助するための専門的実践能力を養うことを目的としている。教授方法は講義及び学内演習を行っており、講義で学んだ知識をもとに学内演習で体験的に学習をしている。従来から、看護技術演習は項目の細切れな知識・技術の伝達であったり、学生が手順に終始することなどが教育上の反省として挙がっていた。そして、平成９年度のカリキュラム改正に伴い、「看護技術」から「援助技術論」と科目名を変更した。新カリキュラム改正の主旨は、人間を統合された存在として理解できる人材を育成するためである。そして、健康上の問題を解決するために科学的根拠に基づいた看護実践ができる能力を求められている[1]。

援助技術は、対象の状況に合わせて方法などを選択していくものであり、看護者側が一方的に行うものではないだろう。特に日常生活の援助は対

象との相互関係のなかで成立するものなので、「こうしなければならない」と手順のこだわった型にはめた教授方法では、臨床では役に立たない[2]。援助技術論演習でも単なるテクニックの教授にとどまらず、学生が常に対象の存在を意識し、与えられた状況のなかで、主体的に自ら判断して実践し、評価する事をねらいとした。学生が主体的に演習に取り組むことができるようにワークブック[3]を作成し、平成９年度から使用し修正しながら本年に至っている。

今回アンケート調査を行い、学生のワークブックの活用度及び主体的な取り組みの程度、各演習項目に対する学生の認識を明らかにすることで、今後の演習指導への課題を検討したので報告する。

Ⅰ．研究目的

援助技術論演習ワークブックの活用度を通して主体的な取り組みの程度、各演習項目に対する学生の認識を明らかにし、今後の演習指導の課題を検討する。

Ⅱ．研究方法

1．研究方法：質問紙による調査研究
2．調査内容：調査内容はワークブックを活用しての事前学習の程度と、演習項目に対する留意事項を把握する内容としたアンケート用紙を作成した。演習項目のなかから学習初期段階に行う演習で、教員によるデモンストレーション（以下デモストとする）を行うリネン交換、学生自身のデモストによる演習である移送の援助の２項目を選択した。
3．調査期間：1999年５月。２項目の演習直後にアンケート用紙を配布し，翌日までに回収した。
4．調査対象：本学看護学科１年生（1999年入学生）69名を対象とし，援助技術論受講者である。回収率は，リネン交換53名76.８％，移動の援助55名79.７％であった。

Ⅲ．ワークブックの構成及び２項目の教授の特徴について

ワークブックは各項目ごとに「ねがい」「目的」「目標」「事前学習」「演習の準備」「対象の状況」「演習内容」「演習の進め方」「演習の記録」「全体評価」「学習の課題」から構成されている。このワークブックの特徴は「ねがい」を表現したことで、各援助技術項目の学習を通して学習者に期待される成長や変革への期待を述べていることである。このことによって対象の思いを理解したり、包括的な援助技術学習の方向性を示している。また「キーワード・事前学習の課題」では学習を進める上で必要となる知識の確認や関連学習の課題を示すことで、準備性を高め、動機づけを目指している。

「リネン交換」では事前学習で手順の予習を課題としており、演習の進め方は教員によるデモスト後、各自の演習を実施している。「移送の援助」では設定した患者の状況によって移送手段を選択、留意点の学習を事前学習課題としている。演習の進め方は学生によるデモストの後ディスカッションをし、その後グループでの演習となる。両項目とも演習後の‘まとめ’の時間で、学生の演習に対する感想から学びと今後の課題を検討している。

Ⅳ．結果

１．事前学習におけるワークブックの活用について

演習を行う上でワークブックを事前学習としてどの程度活用していたかについて、ワークブックの各項目（上記Ⅲ参照）ごとに事前に目を通したか、その有無を調べた（図１参照）。その結果、ねがいを演習前に読んでいた学生は、リネン交換では41.５％，移動では58.２％であった。次に目的では、リネン交換では62.３％，移動では72.７％であった。また、目標はリネン交換では62.３％，移動では70.９％であった。対象の状況を読んでいた学生は、リネン交換では64.２％，移動では85.５％であった。目的や目標については６割以上の学生が事前にワークブックを読んで演習に参加してい

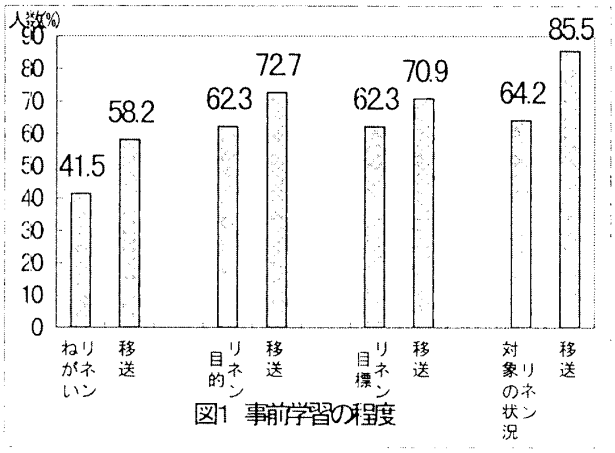

図1 事前学習の程度

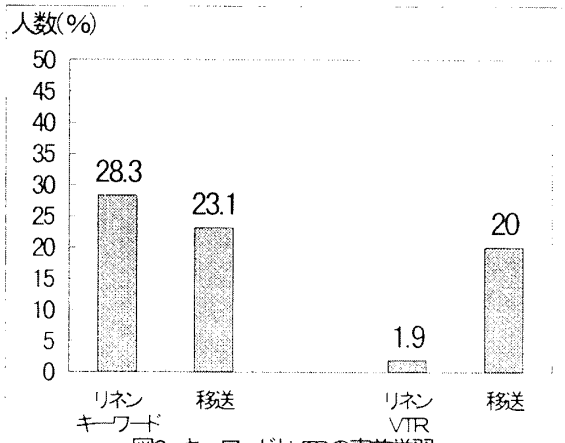

図2 キーワードとVTRの事前学習

るといえる。しかし、演習記録の項目は、リネン交換では37.7％,移動では32.7％であった。さらに全体評価の項目はリネン交換では24.5％，移動では18.2％であり、事前には読んでいない傾向にあるといえよう。

また、演習前にキーワードを学習したか、否かを調査したところ(図2参照)、リネン交換は28.3％，移動は23.1％が調べており、キーワードの学習率は3割に充たず低い傾向であった。次にＶＴＲを視聴した学生をみると、リネン交換では1.9％，移動では20.0％であった。リネン交換においてはほとんどの学生がＶＴＲを視聴していない結果であった。また、事前学習に使った参考文献をみると、教科書以外に手持ちの文献を使った学生はリネン交換では10名、移送の援助では10名で、図書館を利用した学生は皆無であった。

事前学習をすることにより疑問をもって演習に臨んでいるかをみるために、疑問の有無を質問した結果、疑問を持ったと答えた学生は、リネン交換は60.4％,移動は64.2％であった。事前学習の時間をみると（図3参照)、リネン交換では、30分と答えた学生が最も多く52.8％であり、60分22.6％、90分が13.2％であった。移動では30分が32.1％であり、60分が45.3％、90分が11.3％と最も多く,120分以上の学生は7.5％であった。

2．各演習の留意点の認識について

演習目的に安全・安楽をあげていることから、それらの留意点の認識を調査した。演習時に気をつけたことや安全・安楽の認識を一つのラベルとして分類し、重要と思うものから記入してもらった。

1)演習時に何に気をつけたかについて

リネン交換の演習において重要と考えている項目は、1位が“シーツのしわ”であり、2位が“ボディメカニクス”、次に“患者の状態”“速さ”があげられた。移動の援助の演習において重要と考えている項目は、1位が安全、2位がボディメ

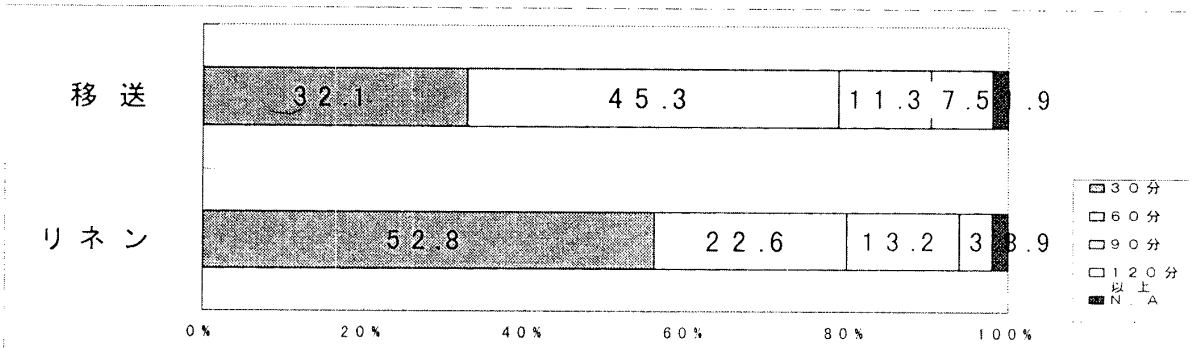

図3 事前学習時間

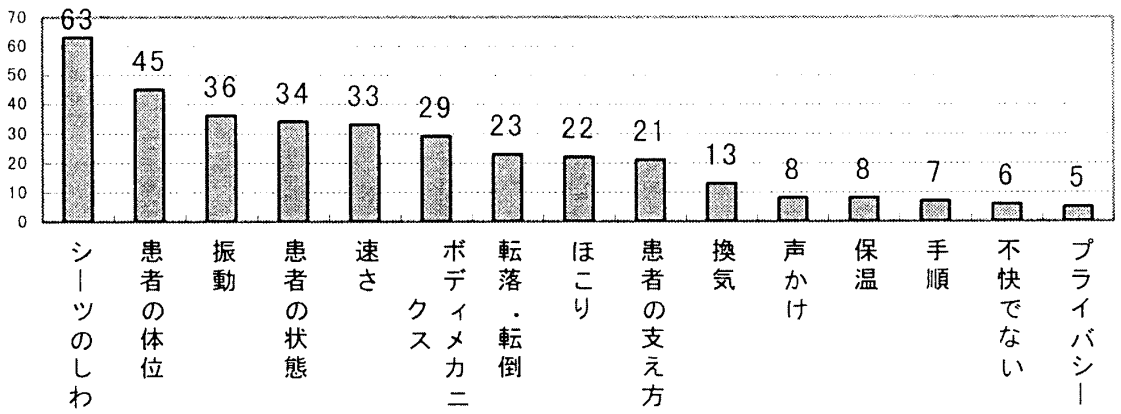

図4 リネン交換の留意点の認識

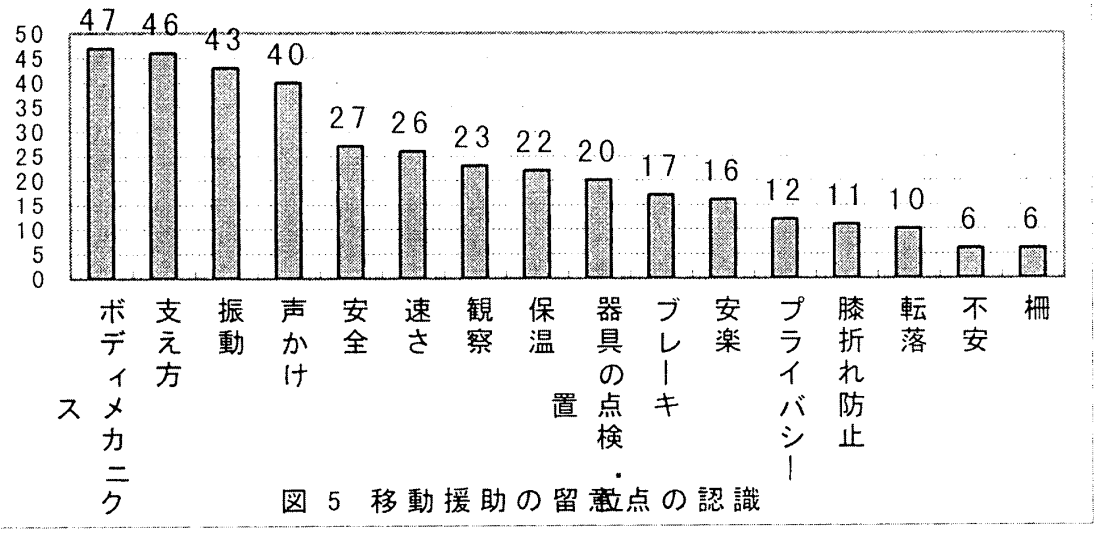

図 5 移動援助の留意点の認識

カニクス、次に安楽、４位に観察があげられた。

２)演習時に対象の安全で気をつけたことについて

演習時に対象の安全で気をつけたことについては、リネン交換の演習において安全のため重要と考えている項目は、１位が“転落・転倒”であり、２位が“患者の支え方”、次に“患者の体位”があげられていた。移動の援助では、１位が“患者の支え方”で続いて“転落”“振動”“ブレーキ”があがった。

３)演習時に対象の安楽で気をつけたことについて

演習時に対象の安楽で気をつけたことについては、リネン交換の演習において安楽のため重要と考えている項目は、１位が“患者の体位”であり、２位が“振動”、次に“シーツのしわ”があげられていた。移動の援助では、１位が“声かけ”“保温”で続いて“患者の支え方”“振動”“ボディメカニクス”があがっていた。

４)学生があげた留意点の認識について

リネン交換について演習全体、安全・安楽の視点から挙がった言葉を総計すると、図４のようになった。学生が最も意識していたのは“シーツのしわ”で、次いで“患者の体位”“振動”であった。“保温”“不快感”“プライバシー”の安楽に関する視点は少なかった。また、移動援助について演習全体、安全・安楽の視点から挙がった言葉を総計すると、図５のようになった。学生が最も意識していたのは“ボディメカニクス”で、次いで“患者の支え方”“振動”であった。

Ⅴ．考察

カリキュラム改正に伴い時間数の制約があるなかで、効果的に学習ができることを目指し、ワークブックを作成したことから、学生の主体性と教育上の課題を考察した。

1．事前学習にみる学生の主体性

ワークブックの目的・目標を通読して演習に臨んでいた学生は6割以上であり、また疑問を持っている学生も6割以上いたので、これは、ワークブックによる演習の動機付けとして有効と考えられる。疑問を持つことは、デモストを批判的に注意深くみることができ、演習のポイントをつかみやすくなるだろう。佐伯[4]は学びのひろがりと高まりの諸段階として、知的好奇心が芽生え、自分の心の中の他人の目（別の視点）でながめたとき矛盾を疑問として意識される段階では、より深く物事を納得することが目標となるとしている。動機づけとしての疑問を大切にしながら、次の段階に進むために疑問を放置することなく、追求することが大切であろう。そのためにも演習前に持っている疑問について検討することも必要であろう。目的・目標を通読している学生は多かったが、ワークブックの特徴としている「ねがい」を読んでいる学生が目的・目標より若干少ない傾向にあった。「ねがい」は文章で表現されているが、「目的・目標」は箇条書きであるため、学生の目に入りやすいのではないかと考える。また、事前学習の所要時間をみると、「リネン交換」は30分以内の者が半数を超えており、「移送の援助」では60分以上かけている者が半数いた。以上のことから、主体的に学習していく態度が育成されつつあるのではないかと考える。

次に、キーワードに関しては2項目とも25％程度しか学習を行っていなかった。キーワードは学生が看護学に関する専門用語をきちんと理解することで、講義との関連や既習の知識を統合する機会となるので重要である。しかし、キーワードの意味が学生に伝わっていなかったり、調べたことを記入するスペースが少ない、演習内での必要性を実感できないことから、全体の¼の者しか学習できていなかったと考える。このことは、技術をテクニック中心と考え、知識との統合性の必要性が認識できていない学生が多いといえるだろう。また、演習前のＶＴＲの視聴も「リネン交換」で1.9％、「移動の援助」で20％と低率であった。その理由は時間がないことを挙げている。20％と低率ではあるが、「移動の援助」では学生がデモストを行う演習方法なので、学生は教科書だけでは理解しにくい留意点などを視覚教材であるＶＴＲが有効であると思われる。しかし、⅕の者しか視聴していないのは、デモストを担当するグループを事前に決めていたので、そのことが影響して担当のグループだけが取り組んでいたと考えられる。事前学習のなかでもキーワードの学習、ＶＴＲの視聴は演習前にすることで、演習のイメージ化ができ、言語の説明においても理解度が広がるので、演習の動機づけとなるだろう。

学生が患者に適した援助を考えるには想像力、判断力が必要である。そのためには患者のイメージ化が必要であるが、初期段階の学生ではイメージ化が困難である場合が多い[5]。1年生前期に学習する項目では、看護に関する知識や技術が不十分であり、演習の事前学習に時間をかけることで、講義や既習項目との関連が理解でき、専門用語を自分のものとすることが可能となるだろう。これらを演習後にしていくことも技術の定着という意味で効果はあるが、演習前に行うことで演習中の理解度が増すと考える。

また、キーワードの学習や事前学習課題をこなすための文献活用をみると、他の教科書や手持ちの参考文献を活用した者が20％未満と少数で、図書館の利用は皆無であった。これは教員が意図していた図書館などの文献を活用し、物事を深く追求する姿勢を身につけてほしいというねがいとはかけ離れた結果となった。ＶＴＲと同様、図書館に行く時間がないことやワークブックのなかに参考文献の提示をしていないため、学習初期の学生は文献の活用を手近なものに限定してしまう傾向が明らかとなった。

以上をまとめると、事前学習に関してはねがいや目的・目標の通読、事前学習の課題などを通して学生個々で疑問を持って演習に臨んでおり、主体的な学習態度はワークブックの活用が動機づけ

になっていると考えられる。しかし、キーワードの学習やＶＴＲの視聴が少なく、教科書以外の文献の活用率が低いことから、事前学習においては物事を深く追求する学習の姿勢までには至っていないことが明らかとなった。演習については学生がグループワークや意見交換を行うことで、主体的な取り組みが可能となり、学習効果も高まると考える。金子は「学生各々の思考や意見の披露によって相互に思考が触発され、拡大され、より多角的な見方、考え方が可能になる」[6] と述べている。学生相互に意見交換をする場としての学生によるデモストやグループワーク、まとめの時間を有効に活用し、グループダイナミクスを活用することが重要であろう。

２．学生の留意点の認識からみた演習の教育上の課題について

１）リネン交換について

演習を通して気をつけたこと、安全・安楽で気をつけたことで挙がってきた言葉を構造化すると、次のように考えられる。(図６参照)

リネン交換は単にベッドメーキングをするだけではなく、常に対象を意識した行動・態度を身につけ、対象の安全・安楽を考えた行動を実践することを目的としている。学生の出した言葉で最も多かったものは“シーツのしわ”であった。シーツのしわに関しては演習の目的・目標には挙げていないが、事前学習の課題やデモストで強調したことが影響しているものと考える。シーツのしわは褥創の原因ともなりやすく、“ねがい”での身体への影響を理解できているものと考える。次に多かったものは“患者の体位”であり、“支え方”と共にボディメカニクスを活用した視点である。一般的にボディメカニクスといったときには看護者の身体を考えやすいが、学生は患者の体位や支え方が挙がっているように患者のボディメカニクスにも視点が向いていると考えられる。患者及び看護者双方のボディメカニクスを意識することで、安全・安楽な援助が可能となるだろう。安全の視点としては“転落・転倒”に、安楽の視点では“振動”に向けられ、安楽の視点が多く挙がった。これらは、患者体験を通しても感じており、体位変換をしながらのリネン交換であるため、患者をベッドから転落させないよう患者の体位に気をつけ、側臥位時などでの支え方などが挙がったものと考える。

また、患者の状態には視点が向いているものの現実の行動としての声かけを挙げている学生は全体的に少数で、意識は薄いと考えられる。これは、患者役に対して配慮しながらリネンを操作することが初期段階の学生には難しく、速さやボディメカニクスといったテクニック的な視点が多くなったものと考える。テクニック的な視点のもとでは対象を“もの”として扱いやすくなるので声かけ

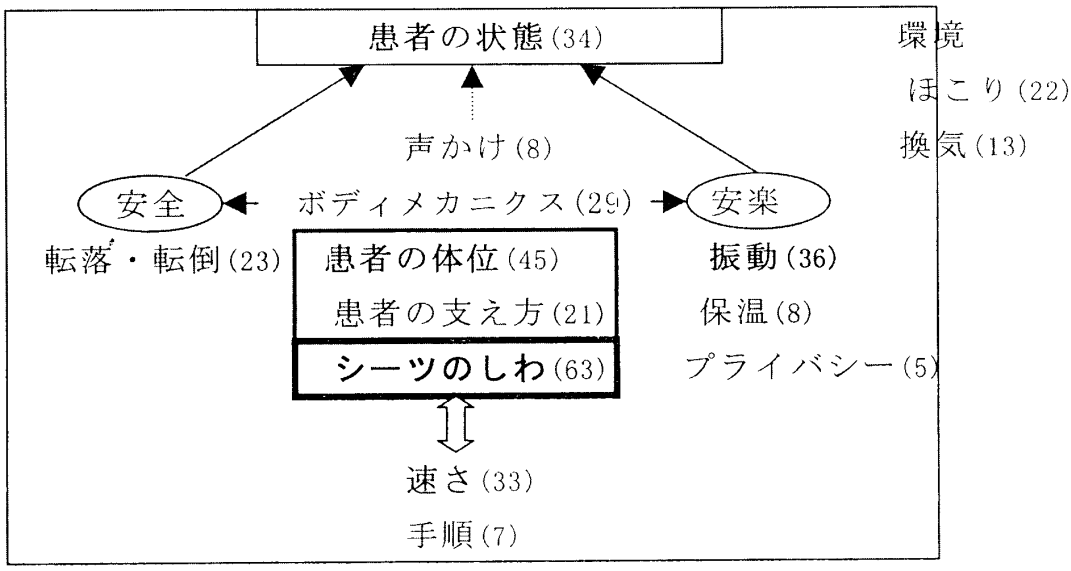

図６　リネン交換の留意点の構造図

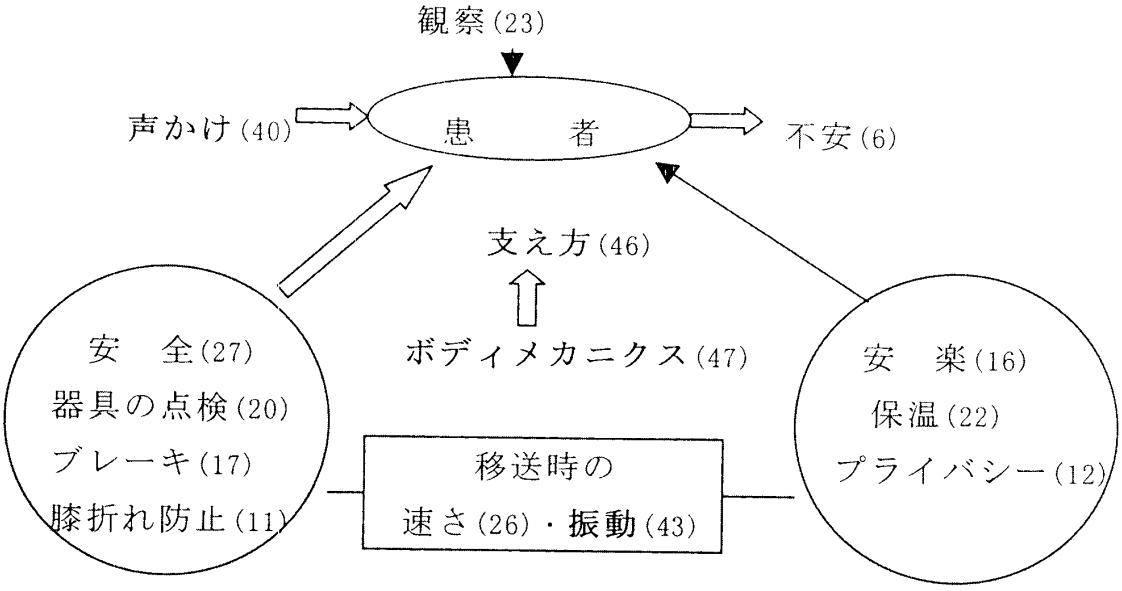

図７　移動援助の留意点の構造図

が重要である。教員は、“ひと”である対象の存在を学生が意識した行動ができるような指導が必要である。また、リネン交換は「環境」の単元の演習項目であるが、演習時間の都合上環境整備については目標に挙げていない。しかし、学生は“ほこり”や“換気”が挙がったことで環境の視点も捉えており、講義との関連性を持たせている学生もいる。

２）移動の援助について

演習を通して気をつけたこと、安全・安楽で気をつけたことで挙がってきた言葉を構造化すると、次のように考える。(図７参照)

最も多い言葉は“ボディメカニクス”“患者の支え方”で、安全・安楽、全体を通して挙がっていた。これはベッドから車椅子、車椅子からベッドへの移動の際にボディメカニクスを意識することで、安全にそして安楽な援助を心がけていることが表れている。また移動の際の視点として“振動”“速さ”が挙がった。

次に患者への声かけが多く挙がり、また少数ではあるが“観察”が挙がったことは対象への意識が強く表れていると考えられる。これは、患者役の学生に説明したり、協力を仰ぎながら車椅子やストレッチャーに移動しなければならないことが影響していると思われる。学生は患者への声かけを通して“不安”を解消しようとしていると考える。「移送の援助」は様々な状況にある対象に、どのように安全な援助を行うかを思考できなければならない。そのためには対象の状態をよく観察しＡＤＬ（日常生活動作）をアセスメントし、声を掛けながら患者の状態を確認していくことが大切であろう。この段階での学生はただ見る、聞くといったレベルであるかもしれない。しかし、不安を持っている相手への関心の第一歩として声かけという行動を起こすことが必要である。観察に関しては未学習であるが、今回の調査でその意識が芽生えていることは大切にしていかなければならないと考える。池川は「看護婦が自己の諸知覚を活用して行為する観察という技術は、ただ見る、ただ聞くといった単純な動作とは異なり、それらの感覚は心によって感じ取られ、さらに思考する力となって相手を知覚するという高次の人間の能力にかかわるものであるといえる。」[7] と述べている。教員は対象に向けられた学生の意識を単純な動作で終わらせず、より専門的な観察や相互の理解が図れるように指導していきたいと考える。

安全に対する留意点に関しては“器具の位置・点検”“ブレーキ”が挙がった。“器具の位置・点検”では器具（車椅子・ストレッチャー）を使った演習は今回が初めてであり、学生は使用前の点

検をし、患者を移動する前の器具の位置やブレーキを意識することで効率よく安全に移動ができると認識していると考える。安楽の視点に関しては、移送時の“振動”が最も多く、患者役体験が影響していると思われる。
また、学生は両項目ともに安全・安楽に関する認識を持っているので、この認識を大切にしながら、実践もできるよう指導していく必要がある。

Ⅵ．まとめ

ワークブックを活用しての事前学習の程度を調査したところ、目的・目標などを読んで演習に臨んだ学生は6割以上いた。しかし、キーワードの学習、ＶＴＲの視聴に関しては両項目とも低率であった。事前学習に使った文献は教科書だけがほとんどであり、時間はリネン交換が30分程度、移送の援助は60分程度が最も多かった。しかし、演習内容に関する疑問を持って臨んでいる学生が6割以上であることは、ワークブックを使って事前学習をすることで動機づけになっている。事前学習において主体的な学習姿勢は育成されつつあるが、より深く追求する姿勢までには至っていないといえる。そして、学習初期の学生は臨床場面をリアルに想像することが困難であるので、事前にＶＴＲを視聴し、イメージ化を図ることが大切である。そして、演習では学生がグループワークや意見交換を行うことで主体的な取り組みが可能となり、学習効果が高まるといえる。

留意点からみた教育上の課題は、「リネン交換」では速さやボディメカニクスのテクニックに意識が向いており、対象への声かけが少ない傾向にある。学生は対象への意識を向けているが、“もの”ではなく“ひと”として接するためにも具体的な行動としての声かけが重要であることを、教員が指導していく必要がある。

また、学生は両項目とも安全・安楽に対する認識を持っていることが明らかになった。さらに、学生は安全・安楽の認識のレベルから援助を実践できるレベルに高めることが大切であり、演習後の主体的な取り組みが重要である。そして、安全・安楽に援助するためにも対象の状態を観察し、アセスメントできる能力を育成していくことが大切である。

おわりに

今回の調査で教育上の課題が明らかとなり、示唆を得たので活かしていきたい。ワークブックを使っての事前学習から演習・演習後へと、援助技術の広がりと定着ができるように、学生の主体的な学習姿勢を育成していきたいと考える。

引用参考文献

1）藤岡完治、「看護教育」編集室編:新カリキュラムの評価の視点と方法（看護教育新カリキュラム展開ガイドブック２），医学書院、1996.
2）中村久美子：批判能力の向上を目指した演習―体位変換・ベッド上移動に２つの方法を試みて―，看護展望，22（13），1997．P29 - 34.
3）石本傳江他：援助技術論ワークブック，大空社，1999.
4）佐伯胖:「学び」の構造，東洋館出版社，1995. P175 - 181.
5）野本百合子：基礎看護技術と看護の専門性―演習における授業展開―，Quality　Nursing，４（３），1998．P25 - 30.
6）金子道子：演習におけるグループ・ワークのあり方とグループダイナミクス―教師の企画・介入を合わせて―，看護展望，14（２），1989. P18
7）池川清子：看護―生きられる世界の実践知―，ゆみる出版，1991．P95.
8）金子史代他：基礎看護技術の学内演習の実際，看護教育，39（３），1998．P238 - 243.